



## 「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～ 第5回（10月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

※個人名の掲載については、本人の承諾を得ています。

※個人情報保護の観点から一部仮名を使用しています。

### 平凡な友情—エストニアワークキャンプの思い出—

湖北省 薛嬌嬌

郵便受けを開けると、日本からの手紙が目に入った。エストニアでの日々が思い起こされる。

今年9月の初め、釣魚島の騒ぎが過熱し、中国国内は至る所で反日デモが行われていたが、私は西村緒紗里、岩田香文という日本の女の子と一緒に、エストニアの大森林で木の枝を運ぶボランティア活動をした。

私と緒紗里との縁は1袋のキャンディから始まった。集合の当日、タリンはどんよりとした曇天。バスターミナルできょろきょろしていた私は、集合地点を探すのにてんでこ舞いだった。ぼうっとしていると、1袋のキャンディが目の前に差し出された。「キャンディ要らない？」私はひとつかみ取り出すと、目の前の女の子をじろじろと見た。一重まぶたの大きな目でよく笑い、歯列矯正のマウスピースなど気にかけていない様子だった。彼女は関西外国語大学の学生で、少し中国語ができ、名札を指さして中国語で名乗ってくれた。

バスと連絡船を乗り継いで合計4時間を要し、途中で明らかに温度の低下が感じられ、雨粒がぱちぱちとガラスに打ち付けた。ぼんやりしていると、近くにいた彼女が腕を抱えて震えているのが目に入った。現地の乗客はみんなセーターを着ていたが、彼女は靴下、ショートパンツ、薄いTシャツしか身につけていなかったのだ。私は厚い上着を脱いで彼女に渡した。「どうぞ、私はたくさん着ているから」「どうもありがとう」彼女は受け取って体にかけた。

活発で明るい緒紗里と違い、岩田香文は内気な子だった。英語名はKaye。ある日の夜、シャワーをして部屋に戻ると、Kayeが窓際の椅子の前にうずくまって日記を書いているところだった。窓の外は藍色の空と真っ白い雲。差し込む光が彼女の輪郭を照らし出して柔らかな美しさだった。私がカメラを取り出したのに気づくと、彼女はブタを真似たように口を尖らせ、落ち着いてくれず「淑女ショット」を撮ることはできなかった。

Kayeの日記は日本語だったので、私は繁体の漢字しか分からなかった。彼女は書きながら、自分の知っている単語を持ち出しては話しかける私の相手をした。それから、彼女が日記を書いた時に私が近寄るようになり、その時間がちょっとした楽しいゲームになった。繁体字が出てくると、中国でどう読むか私が説明し、勉強好きなKayeは全てピンインで書き取った。富士山の麓の桜に話が及んだ時、私は、中国の武漢にある武漢大学にも桜が多いと教えた。日本か中国で桜が満開の時にまた会おうかという話もした。

Kayeはまだ18歳で小さな妹のようだったが、気配りのできる子だった。乗馬を終えて森に戻ったのはいいが、手袋を忘れてしまった時のこと。その日は枝を運ぶ仕事で、手袋をしていないと怪我をしやすい作業だった。Kayeは私が手袋をしていないのを目にして、断ったにも関わらず、自分の右手から外してよこした。「これでみんな手袋ができるね」

森の中だけでなく、台所にも楽しみが色々あった。緒紗里と昼食を作っていた時、ほとんど2人だけでたら一杯の魚と向かい合った記憶がある。私が頭や皮を取ってさばき、塩を振って彼女に渡すと、彼女が鍋に油を注ぎ、魚を揚げていった。魚が黄金色に揚がると、香りが充満し始めた。昼食時、彼女は最初に揚げた魚を取ると、「台所に立ったのは初めてなの。これは私たちの魚ね」と耳打ちした。

「中国の夜」、このために私は、醤油もネギもない小島で、千切りジャガイモの甘酢あんかけ、ニンジンと卵のチャーハンなど中国料理の5品を用意したが、2人は進んで手伝いに来てくれた。食べ始める時、彼女たちは「チャーハン、チャーハン」と喜び私をほめてくれた。

解散前夜のパーティーで、私は「中国結び」をワークキャンプの友達にプレゼントした。日本の男の子、勇作は中国結びを耳に結んで踊り、緒紗里は私の手を引いて跳んだりはねたり。Kayeは「恥ずかしがり」路線のまま、ソファで楽しそうにみんなを見ていた。深夜、片付けに戻ってみると彼女たちはもう寝ていた。偶然、枕元を触ると紙が出て来た。緒紗里が書いてくれたものだ。「嬌嬌、あなたにリュックを置いていきます。中国料理がとても美味しかった、ありがとう。また会いたいね」

驚き、感動、喜びが一度にわき起こった。この子達とワークキャンプで出会えたこと、2週間の生活で誤解を解き、理解を深められたことはとても嬉しいことだった。違う国、違う文化、環境から来ている、共通点はたくさんあった。一緒に国際的スターを占ってみたり、農場のかっこいいスタッフに熱を上げたり、中国料理に舌鼓を打ったり……中国と日本という国について言い始めれば、私は型どおりの印象を持ってしまうだろうと思う。しかし、日本人と触れてみて、付き合うのも交流するのも決してそれほど難しいことではないということに気付いた。ある友人のお母さんから聞いた話を思い出す。「多くの国に行ってみれば分かる。世界の人はみんな同じであるということが。誰にでも身内や友情はあるし、悲しみや喜びを共有できるものだよ」

私も彼女たちの枕元にメモを残した。中国語で、桜の頃にまた会おうと。